



INFORMS（オペレーションズ・リサーチ/経営科学学会）の2005年の研究大会が、2005年11月13日から16日までサンフランシスコで開催された。同大会は、当初ニューオーリンズで開催される予定であったが、ハリケーン『カトリーナ』により同市が甚大な被害を受けたため、会場がサンフランシスコに変更された。

大会には、世界各国から3,000人を超える研究者が参加し（中国や韓国からの出席者が目立っていた）、連日四つの時間帯にそれぞれ40ほどのセッションが設置され、オペレーションズ・リサーチおよび経営科学に関する各方面の研究成果が報告された。また、大会の中では、オペレーションズ・リサーチに関するトレーニングのセッションや2005年に亡くなった線形計画法の開祖として著名なダンツィック氏の業績を称える場も設けられていた。

筆者は、2005年度から「食料供給システムの安定性と評価に関する研究」という研究課題の下で、食料自給率の維持向上に向けたいくつかの政策の評価や将来的にみた食料供給の安定性を数理的に検討することを目的とした研究を進めている。

この研究の推進に当たっては、政策研究大学院大学の大山達雄教授らと共同研究を行っている。本大会では、その成果の一部を、N. Trung, K. Yoshii and T. Oyama, “Applying Mathematical Modeling Approaches for Investigating Japan's Food Supply Security System”（数理的モデルを適用した日本の食料安全保障システムの検証）というテーマで報告した。

あくまで学会報告という性格上、本大会においても、理論的なアプローチやその定式化・モデル化に関する研究報告が大半であり、そこから具体的なデータの分析にまで報告が及んだ例は非常に少なかった。オペレーションズ・リサーチにせよ、経営科学にせよ、実際に直面している問題を解くツールの提供が期待される学問分野である。エネルギーや通信等の分野に関する分析ではそれなりに実際のデータの分析結果も報告されているが、最も明確な形でデータ分析の結果が示されていたのは、スポーツの分野である。野球について、アメリカ大リーグのデータを基に、右投げ・左投げの投手と右打ち・左打ちの打者の対戦成績に関する分析を報告した日本のスポーツ関係の研究者もいた。

今回の筆者らの報告も、日本の食料自給率について一部データに基づく数理的な分析を行ったものの、主テーマである食料供給に関するネットワークモデルについては、その枠組み、制約条件等を提示したにとどまっている。現在、食料需給表や各種の統計データ・業務資料等を用いて品目別の食料供給のネットワークフロー（供給から消費までのカロリーベースでの農水産物の流れ）づくりを進めており、近々、それらのデータを用いた「食料供給ネットワークモデル」を構築する予定である。この分析結果について、関係各方面との調整の上、2006年のINFORMSや欧州オペレーションズ・リサーチ学会（EURO）等の場で報告を行うべく、研究に取り組んでいるところである。



大会の受付会場